



12月1日(日)アドベント初日の朝、玄関にリースを掛けました。毎年、お花の手入れが大好きなお嫁ちゃんがお手製のリースを届けてくれます。今年は赤い実が艶々している可愛らしいリースでした。このリースのおかげでクリスマスを迎えようという思いが漲って来るのを感じます。

12月に入ると、日照時間が短くなり、日暮が早まり、夜の闇が長くなります。私はいつも冬至の日が来るのを楽しみに待つ思いになるのです。

冬至まで「太陽」を求める気持ちが日ごとに高まり、その日が過ぎると明るい日、新しい年が始まるかのような気分になるのです。アドベントの時期には、世の闇、暗さ、不安を払ってくださる「世の光」であるイエス様を求めて、感謝しつつ、日々を過ごしていきます。今年は12月22日(日)が冬至で、アドベント第四主日のクリスマス礼拝となりました。



私は誕生した年のクリスマスに幼児洗礼を授けられました。冬至の頃、厳しい冬の寒さに襲われる雪深い北海道・岩見沢でクリスチャンとして新たに誕生したのです。育児日記には、夜の礼拝の時と記されています。そして、幼児洗礼の記念撮影(左)をしたのが12月22日でした。

教会の伝統、両親の願いによって、何も知らない赤ん坊がクリスチャンになったのです。使徒パウロは律法を守ることによってではなく、主イエスを神の言葉と信じ、御言葉を口に唱え、心に刻むことによって数われると記しています。**なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。(ロマ10:10)** この当時の私は着ぶくれて、お座りも寝返りもできなかったとあり、もちろん言葉は言えなかったでしょう。とんでもないクリスチャン誕生です。

両親の信仰に従って育てられ、礼拝を守り、教会の行事に参加することを当然のこととして成長してきました。説教を聞くことは少し苦痛でも、お祈りしてもらうことが嬉しく、讃美歌を歌うことが楽しい、教会のお友達はみな大好き、というだけで、私はあまり信仰について自覚がなく、ダラダラと教会生活を送っていたのです。洗礼を受ける方たちが、人生の転換という感動を抱いて喜ばれ、新しい生き方に入ったという感激を持っておられることを知るにつけ、私も信仰の確信を持たなくては…という強迫観念もありました。イエス様が苦しむ人と共にいてくださる、弱い人を愛して下さっていることは深く感じていましたが、自分自身の問題としてなかなか自覚することができなかったのです。やがて、将来に備えて、進路の選択などが視野に入ってきた大学生になって、私の進む道は、信仰の確信は持ち得なくても、イエス様に従う道しかないと思うようになりました。

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。(フィリピ 3:12)

使徒パウロは「それ」(信仰の確信)を持っていなくてもよい、ただ、「それ」に向かって進もうという思いがあればよい、と告げてくれています。私はやっと、1964年に信仰告白式に臨むことが出来ました。当時、下谷教会で私のささやかな信仰を優しく見守り、共に学生会で学んでいた友人から、仲間だった鵜飼さんの訃報を受けました。いつも真剣に、誠実に信仰を求め続けていた友人達でした。葬儀で、鵜飼さんが「信仰をおろそかにしていた私は、このままではゴミにすぎない」と言われたとの言葉を、牧師は式辞で紹介され、若い日の信仰に立ち帰って教会生活を忠実に送ったと語られました。東大教授にもなられた優れた研究者が、イエス様に従って生きる喜びを最上のものとされたとの信仰を知り、喜びが湧き上がりました。2019年、私は感謝しつつ、受洗記念日を味わっています。